**№4　テーマ『絆と愛』**

**講話日2012年1月16日**

**新年、あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いいたします。去年の漢字は「絆」という字になって、去年一年間は非常に絆が強く意識された年でした。これは東北の大災害というものがあって、いろんな意味で絆になっているのが改めて自覚された年になってきたわけですけど。今日はそういうこともあって、これからの時代を生きる我々にとって、いかに絆というものが大事で、また絆というものを大切にしながら生きていくということは、これからの時代において非常に大事な課題になってくるということをお話をさせてもらいたいと思っております。**

**絆は言葉を変えれば、愛と言ってもいいようなそういうことだと思いますので、今日はその絆と愛というテーマで人間関係の大切さ、またはどういう風な絆というものの理解の仕方が大事なのか、ということについてお話をさせてもらいたいと思います。とにかく去年は親子の絆あるいは兄弟の絆、またいろんな意味での国民的な意識の繋がりにおける絆、また全世界的な援助が日本に差し伸べられたということで、人類の絆というのはいろんな意味での結びつきというか、心の繋がりというか、そういうものが強く意識されて、そのことによってまた被災された方々も元気を取り戻して頑張ろうという気持ちになれたということもあって、何かことがあった時に頼るべきものがあるとないとでは、人生の味わいが違ってくるということですよね。もし自分に何か事が起こった時に何かしら手を差し伸べてくれる、あるいは自分として頼れる人の存在というものが、いかに人生において大事なものなのかということが、去年の大災害を通して気付かされたと思うんですよね。その災害の中で、多くの方が自分の身を顧みずに他人の命を救うために尊い活動をなされた。一体なぜ、人間は自分の命を捨ててまで他人を救おうとするのか。よく線路に落っこちた人を救うために列車が入ってくる所へ飛び込んで、そして線路に落ちた人を救うという風な身を挺して人を救う行動をすることもある。何かしらあっと思うと、理屈を超えた行動を人間は取ってしまう、ということがあるわけですよね。川に子どもが落ちて、溺れてしまいそうになると誰でも「なんとかしなくちゃ」とついつい理屈を超えて救おうとする気持ちになってしまう。そういう体験は誰にでもあると思うんですよね。交通事故なんかでも車に轢かれそうな状況になってくると、「あっ」と思って「助けなくちゃ」とそういう気持ちについついなってしまうことがありますよね。そういう人間の理屈を超えた愛と言ってしまえないようなもっともっと深い命の繋がり、絆というものが人間の存在にはあるんじゃないかと思われるわけです。どうしてそういう行動が出てくるのかということなんですけども、絆ということについて学問的に分析していくと、絆というものには３つの次元、３つの絆というものの在り方があるということが見えてきます。**

**その第１番目は命の絆、第２番目は心の絆、第３番目は肉体の絆という重層的な構造で、絆というものが人間の命の中に存在し、また働いてると考える必要があります。命の絆とはどういうことなのか。これは自分には自分の祖先がいて、お父さんお母さんがいて、命というのは地球上に単細胞生物が出てからずっと命の繋がりというものを通して、我々はこの時代に生まれてきたという事実があるわけですよね。いわゆる自分の命には、38億年間の歴史と記憶が刻まれている。そういうものを我々は命の中に宿しながら、今生きているんだと。そういうものが命の絆というものを考えることによって、見えてくるわけであります。誰でも彼岸とかお盆などでお墓に参るということをされると思うんですけど、お墓参りをするというのはどういうことなのか。お墓に行くと、先祖代々のお墓が建っていて、それに対して我々は手を合わせて…と、そういうことをするわけですね。では、そういう行為の中にはどういう意味があるのか。で、我々の命の中には38億年間の自分の祖先たちの生き様というものが存在し、その影響を受けながら我々は今の時代を生きているわけであります。**

**つまり、自分の祖先たちの生き様すなわち過去からの命の繋がりが、今の自分の人生に大きな影響を与えながら我々は生きている。ということは、自分の命の祖先たちが犯したさまざまな罪、あるいは出来事、災いのようなものが、過去で終わってしまうのではなくて、遺伝子として残っていて、それが我々の自分の人生に違う形で現れてくる。そういう構造があるわけです。ということは、我々は自分の祖先たちが犯してその時代に償われなかった罪というものを、我々は今の時代において自分が背負って、そしてその罪の償いをすることによって、自分の命の祖先たちの罪を自分が償ってあげて、そして祖先たちの冥福、幸せを祈る。あるいは自分の命の祖先たちを幸せにしてあげるような生き方を我々は現実において、していかなければならない。そのために何をするかというと、仕事をして、人を幸せにする。それが職業ですから。人のために尽くして、人のために働いて、人を幸せにする、という行為が、自分の命をこの世にあらしめた祖先たちの犯した罪を償い、祖先たちの命を幸せにする結果をつくり出していきます。そういうことのために我々はお墓参りをするわけであります。祖先たちのおかげで我々は今生きているんだ。38億年間の間、あらゆる苦難を乗り越え、勝ち続け、生き続けてきたおかげで、この時代に生まれ出ることができた。それと同時に自分をこの世に生み出すために戦わざるを得なかった、心ならずも他の生命を殺めざるを得なかった祖先たちの命の罪を、祖先たちの努力に感謝しながらも償う生き方をすることによって、祖先たちの魂の救いをすることができる。そういう思いを持って我々は、祖先たちのことを思い、お墓参りをしなければならない。いわゆる墓参りには、命の絆に対する我々の思いと行為、実践がその中に表現されているわけであります。自分の命に内在する38億年間の命の歴史、絆についてもよく考えてみて欲しいと思います。**

**これは、誰も逃れることのできない歴史的事実として、自分の命の中に絆として存在する関係性であります。単に自分が幸せになるためだけに働くのではなく、社会において人のために尽くし、人を幸せにするために働き、人を喜ばせるために生きるという生き方が、自分の命をこの世にあらしめてくれた38億年間の祖先のさまざまな罪をも償って、命そのものを祖先を含めて幸せにしていく。そういう活動が職業を通して行われているということを考えてみてもらいたいと思います。そういう気持ちを持って、仕事をしてもらいたいと思います。自分の命の祖先たちの努力に感謝すると同時に、その祖先たちが心ならずも犯さざるを得なかった罪というものを我々がこの時代において罪を償うことによって、自分の命を根源から救う、という生き方、それが職業というものの大きな価値である、意味であると思いながら、また現実の仕事に励んでいただきたい。**

**心の繋がり、心の絆というものもあります。心は感性ですので、感性の絆ということができるわけですけど。人が苦しんでいると、なんとなく自分も人の苦しみが感じられて、助けてあげたいという気持ちになったりなんかする。今回もやっぱり、東北の方々が財産を全部なくしてしまって、身一つでなんとか生きていこうとなさっている姿、苦しみを見ると、共感して、何かしら助けてあげたい、何かしら苦しみを救ってあげたい、何か役に立つことをしたい、そういう気持ちが湧いてくる。そういう心の繋がり、心の絆が持っている大事な人間性というか、血の通った温かなものが存在するという証があるわけであります。**

**これは人間の本質は感性なんですよね。理性ではなく、人間が感じるところに本質がある。心というのは、血の通った温かな心と言われるように、人の苦しみを我が苦しみと感じ、人の悲しみを我が悲しみと感じる。人の思いを共感して、そして心の繋がりというものをつくっていく…という働きが心にはある。感性というのは、自分の心の中にあると感じる力だけではなく、我々は生きている環境、空間世界そのものが感性の海なんですよね。感性というものが空間の中に存在するから、我々は人の苦しみを感じるという心の繋がりをつくっていくことができる。そういう意味では、宇宙は感性の海だ。全てものは感じ合っているんだ。そしてその感性が、我々人間の本質というか人間というものの人間性の中核を担っている。そういう意味においては、我々は心の繋がりと言うか、感性という感じる力、絆、繋がりというものをつくるための働きとして、もっともっと自覚する必要がある。**

**これは仕事の上でもお客さんがどういう風に感じていらっしゃるのか、自分たちの建築現場とかいろんな事務的な仕事の仕方というものをお客さん自身が、どのように感じて見ていらっしゃるのか。どういう感情を持って我々、仕事をしている人間にお客さんが関わっていらっしゃるのか。そういうお客さんの心の揺れ動きもちゃんと受け止めて感じようとする努力をしていないと、なかなかお客さんの本心というのは見えてきません。ちょっとした事務的なお客さんへの対応の中でも、何かしらお客さんが納得していないような表情をしたり、あるいは電話なんかでもあまり気持ちが良くないような反応を示されることがあれば、そういう時もお客様が何を望んでいるのかという気持ちを感じ取って、それに対応するという姿勢が仕事のサービス、心遣いとして表現されたならば、仕事もうまくいくし、またお客さんにも満足を与えることができる。それに一緒に仕事している仲間同士もいろんな会話や行動の中で不機嫌にしてしまったり、納得できない目をしたりということをもっともっと感じ取って、我々は心の良き絆をつくる努力をしていくことが、血の通った温かな心を持った人間性の大事な働きであると思います。もっともっと心の絆を感性を通してつくる努力を、我々は家庭の中でも職場の中でもしていくことを大切にしなければならないのではないか。**

**とにかく、人間同士はいろんな影響を与えながら生きていますので、いろんな人間同士の関わりを心の繋がりを感じながら、対応していく。それが仕事の質を向上することになってくるし、心遣いの豊かな人間性に成長していくことになっていきます。感性というものが空間の中にあって、それがために誰かが危険な目に合いそうな瞬間、ハッと思い、反応を示すことができる。感じるということは、人間の中に感性があるだけではなく、空間そのものが感性だから、距離は離れていても相手の気持ちが波動としてビンビン伝わってくる。そういう命の危険というものが自分の命に波動として伝わってきて、あっと思って、何かしてあげなくっちゃっていう気持ちになっていく。それが心の繋がり、感性というものによって結ばれた人間関係というものの原理であります。そういうことで、是非もっともっと相手の心と自分の心を共振・共鳴・共感させることが、仕事でも家庭でも考えてもらいたい。自分の気持ちを相手にわかってもらいたいって言うだけじゃなくて、相手の気持ちを自分が受け止めて、感じて、わかるということをもっともっと大事にしてもらいたい。これはある意味で愛の表現、愛の心遣いと言えるものです。心の結びつき、繋がり、絆というものが現実に非常に大きな働きをしている。その心の絆をつくれないという状況で、いろんな人間関係の問題が出てくるわけであります。とにかく、相手の気持ちをちゃんと受け止めて感じる、心の絆のつくり方についても考えてみてもらいたい。**

**第３番目は、肉体の絆。これは、具体的には新陳代謝と言われるものです。人間の命というのは解放系と呼ばれ、自分の命とは新陳代謝を通して全宇宙と繋がっている。自分の命を保つために外にあるものを食べて、要らなくなったものを外に排出する…その循環の中で我々の命は保たれている。我々は生活をしていくためにいろんな人の助けを得ています。食べるものをつくってくれる人がいる。着るもの・服をつくってくれる人がいる。生活をしていく上で必要なものを提供してくれる人がいる。自分が生きていくために仕事をしてくれている人は、社会にいっぱいいるわけですね。また、自分がお世話になっている人が生きていくために関わっている人もいる。現在は世界がグローバル化していますから、日本人が生きていくためにいろんなものを海外から輸入しなければならない。そういう意味でどんどん考えていくと、我々の肉体が存在するために、一瞬一瞬全人類のお世話になりながら自分の命が保たれている。そういう絆が繋がれているということを肉体を通して感じることができるわけであります。**

**よく家族とか、他人という言い方をしますけど、現実は決して自分と利害が対立するような他人という関係性ではなくて、全人類は自分というものの存在を支えるためになんらかの意味で皆関わってくれているのが現実なんだ、ということを我々は知る必要がある。だから世界中どこへ行って誰と会っても、「いつも大変お世話になってます」と言わなければならない繋がりも現実に存在して、地球という星での生活というものが成り立っている。自分が生きていくために全人類が関わってくれているということも考えてみる必要があります。とにかく絆というのは、命の絆、心の絆、肉体の絆という３次元構造を持って、絆は存在する。このことを仏教的に言うと因縁といって、命には原因・結果という構造で成り立つ「因」というものと、同一空間内でいろんな人が交わる「縁」というものがあって、命は因縁という原理で成り立っているというのが仏教の解釈です。命の絆、心の絆、肉体の絆というものが現実に存在して、我々はこの時代、今を生きている。また生きているということを知る必要があるし、それをどのよう自覚して、これから仕事をし、生きていくかを考えなければならない。**

**絆というのは、言葉を変えれば愛とも言えるわけなんですけど、実際問題、我々が愛と言っている内容というのは、実は命の繋がり、心の繋がり、肉体の繋がりというものを含んでいるのであって、そのことを通して愛とは何なのか、を考えていく必要があります。こういうことを我々は知ることによって、世界中どこでどんなことが起こっても、そのために不幸になったり、そのために苦しんだりする人たちに対して、何かしら手を差し伸べたい、またそうしなければならないという気持ちが湧いてくる。そこに人間としての尊い生き方というものがあるんだ。成り立つんだということを考えてみる必要があると思います。**

**今日、世界はグローバル化して、どこで何があってもそれが全世界に影響を与えるようになってきておりますので、そういう意味においても心の繋がりというものを感じながら、どんなことでも全人類が力を合わせるならば、乗り越えられるんだ。どんな問題でも全国民が力を合わせるならば、乗り越えられるんだ。またどんな問題が会社に起こっても全社員が、その問題に対して利害を超えて心を一つにするならば、どんな問題でも乗り越えられるんだ。また家庭でも全家族が利害を超えて心を一つにして協力すれば、どんな問題でも怖くない、乗り越えられるんだ。そういう生き方をこれから我々はしていかなければなりません。これが団結力と言われるものです。会社、社員の中で団結力というものの必要性がよく言われるわけですけど、団結力というのはどんな問題でも社員が利害を超えて、その問題を皆で協力していこうという気持ちがあったならば、何も怖くないと。そういう力が湧いてくるわけであります。これもやはり絆の力なんですよね。**

**そういう理屈を超えた心を一つにして事に当たるという風な生き方というのは、今の社会には求められている。今日のユーロの問題でもヨーロッパにおける国家の財政破綻の問題でも、いろんな問題が世界にあるわけですけど、それも皆、全世界に影響を与えるような大きな出来事ですので、それに対して、全人類がその問題に対して協力して、全世界が協力して乗り越えていこうという気持ちになったならば、どんな問題でも怖くない、乗り越えられるという生き方がこれからの世界には求められるわけですね。国の内部でもあれこれ対立したりしていましたが、どんな問題でも全国民が力を合わせたならば、乗り越えられるという新しい団結力を持った生き方を国家としても考えていかなければならない。それは会社でも家庭でも同じこと。どんな問題でも皆が心を一つにして力を合わせようと思ったならば、決して人生は怖くない。ここに絆の大切さがあるわけです。今回の東北の災害でも、全国民の何か役に立ちたいという絆の力が示されたから、悲しみに耐えて、生きていこうという希望を持つことができた、ということがあります。とにかく、絆の大切さというものを会社の在り方においてももっともっと考えてもらいたいと思います。社員の絆だけではなく、お客さんともそうですし、いろんな意味での絆の必要性と大切さを…。利害を考えて人と関わるというのは良くないことではありますが、だけども、自分が何かしら自分の自己中心的な思いを捨てて、お客さんに関わって、そして絆と言えるものをつくり上げたならば、かけがえのない命の財産と言えるようなものを我々は自分のものにすることができるかもしれません。そのこともあって、もっともっと絆の大切さ、ことが起こっても頼れる人がいる、助けてくれる人がいるという絆をつくるために我々は仕事をしているんだということをよく考えてみてもらいたいと思います。**

**そういう意味で、絆というのは愛と言ってもいい、そういう言葉ですけども、そういうかけがえのない命の繋がり、心の繋がり、肉体の繋がりをつくっていくために、我々は具体的にどのような努力をしていったらいいのか。それを次に考えてみたいと思います。本当に自分のためを思って関わってくれる人、そういう絆をつくろうと思ったら、どういう努力をしたらいいのか。そのためには、まずは人間への深い理解というものが非常に大事であって、人間への深い理解というのは、お互いが心を通わせる、何かしら人間として分かり合えるという力がないと、なかなか繋がりはつくっていけませんので、まず人間への深い理解とは一体何なのかということですね。人間とはなんなのかということをちゃんと知って、そして関わっていくということをしないと、心のすれ違いが起きたりして、ちゃんと心を結べない、絆がつくれないということになってしまいます。まずは人間への深い理解が非常に大事な課題であります。**

**人間への深い理解というのは基本的に２つあって、１つは人間の本質は心だ。だから人間は心を求めているんだ。理屈ではない、心が欲しいというのが人間の本当の叫びなんだ。人間が皆欲しいと言っているのは、心なんだ。恋愛をしている男女の関係の中でも大事なことですし、夫婦の関係でも心が欲しいということを本当にわかって関わっているか。あるいは親子の関係においても心を求めている、心が欲しいんだ。このことをどこまでわかっているか、ということなんです。だけど、現実的には皆心が欲しいと思っていながらも、実際に心をあげている人はなかなかいない。ほとんどが理屈。会社でも家庭でも夫婦でも親子でも理屈で動いている。あらゆるものが理屈で対応し、動いている。それがあまりにも多すぎて、心をもらったという実感がない、またあげたという実感もない。そういう生き方がなかなかできていない。皆、なんか心のすれ違い、何かしら満足できない、納得できない、何かちょっと隙間風が吹いていて、なんかうまくいかないという。人間関係が苦手という人が非常に多い時代なんですけども、それがやっぱり近代の理屈の時代から心の時代へと時代が大きく転換してるということは、実際問題わかってないですよね。理屈さえ通ったのなら、何でもうまくいくんだという。そういう理性の時代の思いというものは、まだまだ多くの人が持っている。しかし、理屈を超えた心が大事なんだという理解はまだまだできていない。だけども、これからは常に皆、心が欲しいんだ。理屈が欲しいんじゃない、皆心を求めているんだ、ということをもっともっと意識しながら関わっていかなければならないかと思います。**

**お客さんに対応する場合でも結局は心が欲しいんだ。本当は心から関わって欲しいんだ。心をくれよと言っているんだということを感じながら仕事をしなければならない。社員同士でも相手が求めているものは心だ、心遣いだ。自分の心を満たしてくれるものを皆、求めているんだ。心が欲しいんだということを忘れないで、社員同士も関わってもらいたい。家庭においてもそうだ、自分の子どもの場合はお父さんお母さんも自分の子どもの心を求めているんだ。またお父さんお母さんも心が欲しいんだ。おじいちゃんおばあちゃんも。社長さんも社員の心が欲しいんだ。社員も社長さんの心が欲しいんだ。一番欲しいのは心なんだ。それはなぜかと言うと、人間の本質は心だから。人間が最後に求めているものは、ものじゃない、金じゃない、理屈じゃない、心なんだ。愛なんだ。そのことをよく考えてみる必要がある。これを常に仕事のときでも、お客さんと対応するときでも、社員と付き合う場合も家庭の中でも忘れないで、常にこのことを最も大事な原理として人間に関わってもらいたいと思います。**

**だけども、皆心を求めているんですけど、人間は不完全ですから心を満たしきることがありません。だから、人間は誰でも満たされない心を抱えている心悲しき存在です。どんな人の中にも「俺のことなんて誰も本当にはわかってくれない」という孤独な魂の叫びというものがあります。「なんであの人は・上司は自分の苦しさ、辛さをわかってくれないのだろう」という気持ちになってしまうことが多い。しかし、寂しい思いをしているのは自分だけではない。上司もやっぱり「なんで部下は俺の辛さをわかってくれないんだ」というね、「俺の努力をなんでわかってくれないのか」ということを思い、生きているんだ。お父さんお母さんだって、皆子どもから愛されたいんだ。「なんで子どもは俺の辛さをわかってくれないのか」という思いをお父さんお母さんも持っているんだ。誰にもわかってもらえない、孤独な魂の叫びを持って生きているのは自分だけではない、皆そうなんだ。社長さんも上司も皆、誰にもわかってもらえない寂しさや辛さを抱えながら、「なんで、なんで」という気持ちを持って皆生きている。それが現実なんだ。決して自分だけではないということをわからないと、絆というものはつくれない。「なんで自分の心、辛さや苦しみをわかってくれないんだ」と思っているだけでは、自己中心的な心情で人を責める人間になってしまう。本当に絆をつくろうと思ったならば、自分もそうだけど相手もやっぱりそうなんだ、と。相手の中にも自分と同じ思いがある、同じなんだと。それがわかって相手の気持ちを共感できる、相手の辛さをわかってあげることができる。心の通い合い、心の結びつきというものがつくられていって、そこに絆というものが生まれてくるわけですよね。「同じなんだよね」「同じなんですよね」と、そういう共感が生まれてくる。人間は誰でも、誰にもわかってもらえない孤独な魂の叫びを抱えている、心寂しき存在である。**

**では、なんで一体、そんなに心寂しき存在なのか。それは人間の人生における実質的な本質が意志と愛というものであって、人間には皆意志があるから、皆認めてもらいたい、わかってもらいたい、褒めてもらいたいという心情がある。また人間には愛がある。皆愛されたいという気持ちを持ち続けて生きて死んでいく。皆認めてもらいたい、わかってもらいたい、褒めてもらいたい、愛されたいと思っているんだけど、誰一人として、自分が求めているようには愛してくれない、認めてくれない、褒めてくれない…という現実がある。これが不完全なる人間の宿命というか、悲しいところであります。だから人間は誰でも、誰にもわかってくれない辛さを常に自分の命に宿しながら生きていかざるを得ない。そういうことがわかったのなら、人と接するとき、「誰でも人間は認めてもらいたい、わかってもらいたい、褒めてもらいたい、愛されたいと思っているんだ」、「これが人間の本心なんだ」とわかり、決して叱ってもらいたくない、注意されたくない、批判されたくないんだ。皆、求めていることは愛されること。それが人間の命の本心なんだ。そのことを充分に自分の心に置きながら、持ち続けながら人と関わらないと、絆というものはつくれません。いわゆる心の結びつきはつくれません。心の通い合いはできません。**

**心が欲しいということは何が欲しいのか。それは、愛されたい、認めてもらいたい、わかってもらいたい、褒めてもらいたいということなんだ。愛するということは恋愛的な愛ではなくて、愛するということは認めること、許すこと、信じること、待つこと…そういうことが愛の内容であります。まずは人間への深い理解ということの第１番目に、人間の本質は心だ。だから、皆心が欲しいんだということをどこまで深く理解しているかということが、絆をつくっていくために大事な原理となります。**

**第２番目は何なのか。第２番目の人間への深い理解は、これはいつも申し上げていることですけど、人間は誰でも長所半分、短所半分という構造で人間性は成り立っています。どんな人間でも長く付き合ったら必ず自分から見たら「嫌だな。こいつのこういうところが嫌だな」というところが半分は出てくる。これは避けがたい宿命なんだ。ちょっと付き合ったときは素晴らしい人に見えても、長く付き合っていると必ず自分にとって「嫌だ」と思うことが、半分は見えてくる。これは避けがたいことであって、どんな人間でも他人から嫌われ、軽蔑され、非難されるところを半分は持っているんだ。どんな人間でも他人よりも素晴らしいところを半分は持っている。これが個性というものを持った人間性の現実である。**

**そして長所も短所も誰にでもあるものであって、なくならないんだ。これまでは、短所はなくす努力をしなきゃならんと言われてきましたけど、でもなくなったら人間でなくなってしまう。人間は不完全なんだから、人間は短所があって人間なんだ。人間と心の絆をつくっていく、人間を愛するためには、長所だけではなく短所も愛するという力がなかったら、絆はつくれないんだ。人が失敗したときに慰めたり励ましたりする、これは人間が不完全であることを認めているから、わかっているからできるわけであります。失敗したり、ことがうまくいかなかったときに人を責めるような、そういう人間には血の通った温かな心はない。短所というものをどのように考え、どのように扱うかという具体的な実践というものが、人間において非常に大事であって、これがちゃんとできないと本当の理屈を超えた絆というものを人間関係につくることはできません。**

**人の短所を責めるような人間には、血の通った温かな心はない。なぜそういうことが言えるのか。まずは短所がなくなったら人間ではない。短所とは一体何なのか。人間の本質は心。それは謙虚な心。そういう心をつくってくれるのは短所だ。長所ではない。短所がなくなってしまったら人間は謙虚になる理由がない。短所がなくなったら人間は謙虚にする根拠がなくなってしまう。短所がなかったら謙虚になれない。短所がなかったら血の通った温かな心を持てない。人が失敗したときに、それを許したり励ましたりする。それは短所があること許している、認めているからそういうことができるのであって、失敗を責める人間は、人の短所の存在を許せない、認めようとしない。そういうところに人を責めるという行為が出てくるわけであります。これは人間として最も醜い心情である。**

**国会なんかでもしょっちゅう人を責めることをもって、正しい、正義だと考える。人を責めることをもって、自分はいいことしている…みたいな。そういうことで議論をしていることがよくありますけど、あれを見て国民は国会議員を信用できなくなってしまう。「なんて嫌な奴や」と思ってしまう。自分が人を責めているときには理由があって、人を責めたり叱ったりしているんですけども、その場面を客観的に外から見たときには、人を責めている人というのは、「本当に嫌な奴や」という気持ちになってしまうことが多いですよね。人を責めているときには多くの場合、血の通った温かな存在は感じられないんですよね。だから人間として立派とは言いにくいんですね。現実的には叱らなければならないときもあるし、時には腹を立てて憤慨しなければならないときもあるかもしれません。けど、決して冷たい心情でそうするんじゃなくて、例え人を叱る場合でも注意する場合でも憤慨する場合でも、人間への愛がなければならない。人間の不完全さというものに対して、それを許せるという温情というものが根底にあって、はじめて叱り方にも変化が出てくる。注意をする場合でも仕方・表情が違う、言葉が違う、態度が違う、そういうものに人間への愛というものが出てくるわけですよね。そういう意味でも短所はなければならない、ということを知りながら、注意したり、叱ったり、憤慨したりする。ちょっと複雑な心情かもしれませんけど、それが非常に大事な人間の心遣いであります。**

**短所がなくなったら人間ではない。短所はなければならない。短所がなくなったら謙虚になる理由がなくなってしまう、謙虚にする理由がなくなってしまう。短所はなければならない。だけども、短所が出てきたら人に嫌われるから、短所は出てこないように注意をする必要がある。これは自分もそうだけど、他人が短所を出しちゃったときには、「君には良いところもたくさんあるけど、そこのとこが君の短所なんだから、それが出てきたら人に嫌われてしまうから、その短所はできるだけ出てこないようにしなきゃいかんよ」と思って、愛を持って忠告しなければならない。愛を持って叱ってやらなければならない。短所が出てこないようにと言わなければならない。短所が出てきたら謝らなければならない。それは人に嫌な思いをさせるから。また、人の短所を発見しても責めてはいけない。人の短所は「助けてあげよう、助けてあげなくちゃ、助けてあげたい」と思うのが、血の通った温かな心だ。これが短所に対する大事な対応の仕方ですね。**

**もっと大事なことは、自分の短所をわざと曝け出して、「俺のダメなところはここなんだ」と人に助けを求めて、人に助けてもらったら「ありがとう。君はすごい力を持っているね。本当に君に頼んで良かったよ」と言って、相手を褒めてあげる。この行為を活人力と言います。自分の短所を曝け出す勇気がないと、本当に人を輝かせる・活かすという活人力は持てません。会社という組織の中には、役職、地位が上がれば上がるほど助けてもらうという力を持たないと、リーダーにはなれません。リーダーというのは多くの部下を抱えて働くわけですから、だから皆に仕事を与えなければならない。そのためには自分の短所をできるだけ曝け出して、自分の不得手なところを助けてもらって、「君は凄い」と褒め讃えて、ますます相手の良いところを引っ張り出して、成長させていくのがリーダーの役割です。そうではない人はすぐに部下の失策を責める。それにより部下に嫌われていく。そんな人に部下はついてこない。責められたらついてこないんだ。煙たく思われてしまう。表面的には言うことを聞いていても、心は服していない。心から従うというフォロワーにはなってくれない。絆はつくれないんだ。人を助けてあげることも立派なんだけど、人に助けてもらうことも大切な大事な人間としての生き方であります。**

**人を助けてあげることと、人に助けてもらうことは同等の価値がある素晴らしい行為だ。人を助けてあげるだけでは相手を惨めにする。人に助けてもらってはじめてバランスが取れる。上司になればなるほど部下に助けてもらう力が必要なんだ。人に助けてもらうために社員を雇うわけですからね。自分だけでは仕事ができないから、多くの人を雇って助けてもらって一緒に仕事をしていくというのが会社であります。だからもっともっとリーダーは助けてもらう力を成長させていく努力をする必要があります。部下に仕事を与えながら、部下の能力を引っ張り出して成長させて、そして部下を尊敬して、部下を信頼して、部下に感謝して仕事をするということにしていかないと、会社の組織の中での縦型の構造、有機的な組織というのはうまく動きません。とにかく、人間への深い理解ということの第２番目として、人間は誰でも長所半分短所半分、短所を活かす力を持っていないと、人間としての素晴らしい生き方はできない。短所を認めないと、心の絆、人間関係における強固な絆というのはつくれないんだ。そのことを是非よく考えてみてもらいたいと思います。**

**第２番目の絆をつくるための努力は、「理屈を超えた生き方」というものを覚えないと、本当の人間における心の絆というものがつくれないということです。理屈を超えた生き方というのはどういうことなのか。ついつい我々は理屈で、利害損得でいろんなことに関わりがちです。そこには理性的な作為が働く。いわゆる金の切れ目が縁の切れ目ということになってしまうことが多いです。お金やものとは関係なく、人間関係に絆ができて、そして理屈抜きに相手と良い関係が結べるという状態になって、相手のためなら一肌脱ぐということができたり、あるいは組織の中では部下の失敗を自分が背負って泥をかぶると、そういう理屈を超えた、利害を超えた行動などをするためには、どうしても我々は理屈を超えた愛の力というものが必要になってくる。理屈を超える愛というものを持たないと、絆という結びつきはつくれない。理屈を超える心の絆というものは、利害打算が働いている間はつくれない。ついつい相手を利用しようとか、そういう作為が見えてきてしまって、本当の温かな人間関係というのは理屈を超える言動がないと生まれてきません。お父さんお母さんは自分の子どものためなら、どんな努力もする。子どものためなら命もいらんという思いになるのが親。何かしら相手が困っていたら、見て見ぬふりができなくて「助けてあげたい」と思う、そういう利害打算・理屈を超えた行為が示されることによって、理屈を超えた素晴らしい人間関係というものがつくられていく。**

**愛の力とは具体的にはどういうことなのかと言ったら、自分が相手のためにどの程度の自己犠牲的努力を払えるかによって、自分がどの程度相手を愛しているかがわかるし、また相手が自分のことをどの程度愛しているかは、相手が自分のためにどの程度の自己犠牲的努力を払ってくれるかによって、相手が自分のことをどの程度好きなのか、愛しているかがわかる。そういう自己犠牲的努力を払えるところに理屈を超えた愛の力の本質があります。そういう理屈を超えた自己犠牲的努力が絆をつくっていくために大事な行動なんですね。自己犠牲的努力の中に我々は真実の愛を感じる。どの程度自分自身が理屈に縛られない、理屈を超えた言動をすることができるか。これは人間の価値を決めるために大事な課題なんですね。それは人間の本質は理性ではない、心だからだ。そして人間の命というのは愛によって生まれ、愛によって育まれ、愛によって満たされる。人間が最後に求めるものは理屈を超えた愛だ。だから、どうしても理屈を超える何かというものを持たないと、本当の壊れることがない絆というものはつくれないということですね。本当に絆ができてくると、理屈じゃなくて「あの人が言うことだから、だからついて行こう」という、理屈を超えた心の結びつき、心服…心から服するという組織が出来上がってくるわけですよね。絆が無ければあれこれ理屈を言って反対してきたり、妨害してきたりと、理屈での対応になってしまうんですけど、理屈を超える言動ができる人間になってくると、理屈を言わずに「あの人の言うことなんだから付いていこう」と、無条件に信頼される絆ができてくるわけであります。**

**よく組織論では、「部下のためなら死ねる」という上司のもとにしか「上司のためなら死ねる」という部下は育たないとか、「部下のためなら一肌脱ぐ」という上司であって初めて「上司のためなら一肌脱ぐ」という部下が育つと言われます。そこに自己犠牲的努力というものの大切さが組織の中には非常に強烈にあるわけですね。だけど自己犠牲的努力は「自分は相手のために自己犠牲的努力をした」という風に思っていたら、それは自己犠牲的努力の価値はない。ですから、自己犠牲的努力をしていながらも、それを自己犠牲的努力と感じるのではなくて、相手の為に努力をすることに喜びを感じたり、自分の人間としての誇りを感じたり、自分の力に自信を持ったり、そういうことで初めて自己犠牲というのは、理屈を超える美しさを持って、そして理屈を超えた絆ということになります。相手のために自己犠牲的努力をすることができる自分に誇りを持つこと、またそういう自分の力に自信を持つこと、そして相手のために働くことに喜びを感じること、それらがないと本当の理屈を超えるという生き方はできません。たとえ人に褒められなくても自分自身が自分自身の自己犠牲的努力に誇りを感じるような気持ちがないと、人が自分のことを褒めてくれないともうやめちゃうというのは、人の反応によって自分が振り回されるような非主体的な人間になってしまう。人がどうであれ、自分自身でご褒美をあげる、誇りをあげる。人のために尽くすというのは、誇り高い行為だ。自己犠牲的努力を自分が誰かのためにできるという行為自体が美しい行為であり、また誇り高い行為だ。そのことに誇りと自信と喜びを感じて、それをする。そういう生き方が理屈を超えるという生き方になってくるわけですね。**

**職業というのは基本的に人を幸せにすることによって自分が幸せになるという行為。それが中核を成す心情であります。職業は人を幸せにするためにあるんだ。人の幸せに奉仕するために職業があるんだ。その結果として、人を幸せにした結果として、その報酬を得て自分も幸せになる。自分も満足する。それが社会性を表現する職業の基本的な在り方であります。人を幸せにしなければ自分も幸せになれない。人を幸せにする努力が自分を成長させてくれて、自分も幸せになってしまう。それが職業というものの意味であります。どれだけ人を幸せにすることができるか、その力の分だけ自分は幸せになれる。人を幸せにする力が少なければ、自分もそう大して幸せになれない。人を幸せにして自分も幸せになることによって実質的な絆はつくられていくことになります。人が幸せを感じるほどの仕事をして、サービスをする。そのことにより、お客さんは信頼を置く、そのようにして絆はつくられていくわけであります。これだけのお金をもらったんだから、それに相当する仕事をするだけでは理屈の世界だ。計算高い、作為がある。理屈を超えて、本当にお客さんが心から満足して納得してくれる顔が見たい。喜ぶ姿が見たい、そういう思いで理屈を超えて金にかかわらず、何かしら自己犠牲的努力を払って仕事をする。そこに繋がり、絆がつくられていく原理があるわけですね。**

**理性も大事なんですけど、理性には限界がある。理性の限界とは、人間が理性を原理に生きてきた結果、自然が破壊され、環境が破壊され、人間性が破壊され、核廃棄物が生まれてきた…ここに理性の限界があるわけです。我々は理屈を超えるという生き方を覚えないと、理性の限界を突破してより高次元な人間的な世界をつくっていくことはできない。理性的であれば愛すら魂が抜かれてしまって、理性的にしか愛せないということになると、対立が生まれてくる。違う考え方の人間とは一緒に仕事ができない、価値観が違ったら一緒に仕事ができない、これが理性的な人間だ。だけど理屈を超えた生き方ができる人間的な血の通った温かな心を持った人間は、考え方が違っても価値観が違っても一緒にパートナーシップが組めて、そして助け合って一緒に仕事をしていける。そういう人間になれる。ここに理屈を超えるという人間味、血の通った温かな心というものの価値がある。同じ考え方の人としか一緒にやっていけない、相手が自分と同じように考えてくれないと一緒にやっていけない、その人は自分しか愛せない人間だ。身勝手な人間だ。自分しか愛せないような愛は偽物の愛だ。自分と違った考え方・価値観の人間をも活かして使うことができる。自分と違った価値観の人間からいろんなことを学んで自分を成長させることができる。そうならないと人間として大きくならないし、人間として成長できない。人間は不完全だ。不完全を生きることができなければならないし、不完全を生きるとは矛盾を生きることだ。矛盾を生きるとは、違った考え方の人とも一緒に仕事ができること。性格の違う人とも一緒にやっていける。価値観が違ったら一緒にやっていけない…これは理性的な人間で、血の通った温かな心のない人間で自分しか愛せない人間だ。これでは本当に組織を動かしていくリーダーにはなれない。とにかく、理性に支配されない理屈を超える生き方をどの程度できる人間になれるか、これは組織を活かすためにも大事な課題であります。これが２番目に大事な絆をつくる原理ですね。**

**ここで半分の時間が経ちましたので、10分間の休憩を挟んでまた後半の話に入りたいと思います。どうもありがとうございました。**

**それでは後半の話に入ります。**

**絆をつくるための次の原理です。次は人間に完全性を求めてはならないという課題です。もちろん、我々は仕事においても完璧を求め、完全を求めるという生き方をしなければならないんですけども、だけども不完全な人間においてはいかに完璧・完全を目指そうとしても完全・完璧に到達することがない。常に何かしら足らざるところ、欠けている所が存在するという謙虚な自覚が非常に大事であります。であるがゆえに他人の欠けてるところ、足らざるところを見いだしたとしても、これは避けがたい宿命でありますので、そのことによって人を責めてはならない。その場合は「それを補うために俺がいるんだ」、「それを見いだすことができた自分が人を責めるんじゃなくて、その人を助けてあげるために俺が存在してるんだ」、そういう気持ちになることが大事であります。常にそういうパートナーシップというか、１人の人間では絶対に完璧になることはできない、完全になれない。だからこそ他の人間とのパートナーシップ、助け合いが必要なんだということを常に頭に置いていたならば、人の失敗も足らざるところも欠けてるところも責めるのではなくて、相手と自分が協力して初めてより完璧な仕事に近づけられる。それを組織力と言います。**

**組織の中で生きている限り、相手に完璧を要求してはならない。相手の足らざるところを補って、そして共に努力をして、より完璧な仕事をお客さんに提供する。その人だけに任せておいたのでは、足らざるところはその人が気付かなければそれで終わってしまう。でもそれに気付く俺がいるから、組織力としての仕事ができる。そう考えていくことが大事であります。足らざるところ、欠けてるところを見いだしてもその人を責めるという醜い対応をしてはならない。人間は不完全なんだ。決してその人に完全性を求めてはならない。だけども、人間は誰でも完璧を目指す、より以上を求めて生きる。皆そういうことをするんですけど、だけども、原理的にいって誰もが完璧にはならない、完全にはならない。これは宿命である。だから、責めてはならない。そこに協力して助け合って、力を合わせて仕事をするパートナーシップ、組織の意味があるわけであります。往々にして人間関係の絆・繋がりが絶たれるという場合は、ついつい相手に完全性を求めてしまって、人を責めるということをすることによって心の繋がりが断ち切られてしまう。相手を煙たく思って、その人を避けるということになってしまう。そういう意味でも、人間は不完全だということの意味というものを十分に理解して、不完全さを責めない。それが人間として生きていく道であります。人に完全性を求めるということは人でなしの行為だ。**

**とにかく、昔から言われるように「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があって、本当に我々が生きた現実に対応していくためには３人の力を寄せ集めないと、完璧には近づかないという教えが仏教にはあります。「三人寄れば文殊の知恵」、１人の力では限界がある。２人でも限界がある。現実は３人で力を合わせて初めて本当に生きた現実に対応できる力が生まれてくるんだ。なぜ３人なのか。これは現実の社会というのは１人称２人称３人称という立場の統合によって成り立っている。人間は自分の立場で生きることもあるし、また誰かの相手になって２人称的立場で関わることもあるし、また具体的な現場から外れて客観的にものを見るという立場に自分の身を置くこともある。人間は３つの立場に立てる。そして１人称２人称３人称という３つの立場の統合によって、社会の現実が成り立っている。だから、自分の立場からものを見ただけでも偏っている。相手の立場からものを見ただけでも偏っている。第三者の立場からものを見ただけでも偏りがあるんだ。本当の現実というのは、１人称の立場からの見解と２人称の立場からの見解と第三者の立場からの見解と、３つの見解を統合して初めて生きた現実に対応できる力が湧いてくるということになってるわけです。その意味でも我々は、自分の考えがどんなに正しいと思っても、決してそれは完璧ではない。必ずあと２人の違った考え方というものを参考にして、初めて我々は生きた現実に対応できる力を持つことができるんだ。だから組織が大事なんだ。だからチームで仕事をすることが大事なんだ。そこに組織力というものの進化があるわけであります。１人の目から見えないところも他の人の目から見えることがある。とにかく、３つの視点が統合されないと現実というものがつかめないし、対応できない。そういう意味でも人に助けてもらう力というのは、非常に現実的な大事なことなんですよね。人に助けてもらって完璧な仕事ができる。そういう意味では、やっぱり自分自身の不完全さというものをどれだけわかっているかということですよね。人間には肉体がありますから、どんな立派な人間でも自分の肉体のある場所からしか見えない。どんな立派な人間でも今自分の肉体のある場所でしか判断できないんだ。どんな考えにもどんな見解にも必ずそういう偏りがある。**

**一般的には第三者の目から客観的に見れば、物事は正しく見えるだろうと思ってる方が多いんですけど、科学は正しいと思ってる方が多いんですよ。科学というのは客観的にものを見るから。だから正しく見えるんだと思ってしまってるんですよ。だけど、その科学が何をもたらしたのか。それは環境破壊、自然破壊、人間性の破壊。いわゆる物事の正しい在り方を客観的に歪めてしまって、そしてあらゆるものを壊してしまうという結果を生み出してしまった。ここに客観性の塊というのを我々は知ることができるわけであります。理性的にものを見るということは、あらゆ**

**るものを理性的に歪めてしまうんだ。理性的に見れば正しいだろうと思ってるかもしれませんけど、それは理性的に見れば正しいかもしれないが、人間的には歪みなんだ。なぜなら人間=理性ではない。人間には理性と感性と肉体がある。理性的だけでは理性的に歪んでしまうんだ。ここに理性の限界というものが存在する。どんなに自分が正しいと思ってもそれは歪み。それには偏見がある、偏りがある。そのことが本当にわかってくれば、自分が正しいと思っても、あと２人の人間の考えを求めていこう。あと２人の自分と違った考えを探そうと、積極的に人の助けを求めていく本当の人間になれるわけであります。人に助けを求めようとしないということは、ある意味で傲慢な生き方だ。人の助けを借りて初めて「俺は本当に血の通った温かな心を持った人間になれる。人の助けを借りなければ俺は人間としては生きていけないんだ」。人の助けを借りないということは傲慢のりを免れない。偏見を脱却できない。**

**人に完全性を要求するということは、やはり人間として間違っている。だけど人間は完全・完璧を求めていかなければならない。それは人間は不完全なんだけど、完全なるもの絶対なるものを心においてイメージすることができる。絶対なるものを描くことができる。だから人間は不完全でありながらも完璧を目指す生き方をしなければならない。だけど絶対完璧にならない。それを、より以上を目指して生きると言うんですよね。生きる希望を持って生きる、意味を持って生きる、そういう生き方が生まれてくる。人間だけがより上を求めて成長できる生き方ができるわけであります。大事なことは理想・希望・夢と言えども、決して完全ではない、絶対ではない。今よりもより素晴らしいというものが、理想であり夢なんだ。**

**人間と動物の生き方の違いは、動物は与えられた現実にどう適応し対応するか、それだけが動物の生き方。人間は与えられた現実をより素晴らしいものに変えていこうとする、という生き方をするところに人間的価値が生まれてくる。与えられた現実をより素晴らしいものに変えていこうと思ったならば、どうしても理想とか夢とか理念・目標というものをつくらなければならない。それが不完全でありながらも完全なるものを目指して生きるという、人間にしかできない生き方である。だけども決して完全ではありえないし、また完璧になることはできないんだから、永遠に歴史は続くわけですね。人間として生きていく限り、常に欠けているところ、問題が残る。それを解決していくことによって、歴史は前進する。不完全であるがゆえに我々は歴史をつくることができる。**

**問題も悩みもすべて現実をより素晴らしいものに成長させるために出てくる。問題をつくった人間を責めてはならない。問題はより素晴らしいものにしていくために出てくるんだ。問題があるということは素晴らしいことだ。問題がなくなったら現実は停滞する。問題をつくる人間も問題を発見する人間も必要なんだ。共に責めないで活かして使わなければならない。それは組織として問題を起こした人間、問題をつくった人間をプラスに解釈して活かしていく生き方だし、問題を発見する人間の素晴らしさだ。我々は決して問題がなくなることを願ってはならない。問題が出てこないことを願ってはならない。不完全なるがゆえに問題と悩みは出てくるもんだ。問題と悩みこそ会社に目標を与えてくれる。何をしなきゃならんか、今何が一番大事なのか、課題を教えてくれる。それが問題と悩みの出現の意味だ。問題がなくなる完全性を求めてはならない。次々と問題が出てくる、それが発展するということだ。それが成長するということだ。我々は血の通った温かな心を持って、問題や悩みをつくり出す人間を責めないで、その人をも仲間として大切にしながら、共に問題を乗り越えていかなければならない。これが理屈を超えて絆をつくっていくということの意味だ。そして欠けているところがあれば、とにかくは自分がその欠けたるところを補ってパートナーシップを組んでより完璧に近づけていく。そこに不完全な人間の健全な生き方がある。問題があることは健全である。問題がないことは異常。問題がないということはあるのに見えていないだけ。問題は常にある。であるがゆえに成長できる。問題があることが大事だ。そのことによって仕事ができる。仕事をつくり出すことができる。**

**人間に完全性を求めることは原理的に間違いであります。だけど不完全でいいんだと開き直ってしまったらこれは成長はありませんからね。人間は不完全では終わらないというか、不完全という状態では決して納得できないのが人間なんですよ。常に理性的に、理想とか夢を求めてしまうし、もっと幸せになりたいとか良い家に住みたいとか、もっとこうなりたいとか、そういう欲求は命から湧いてきますから。だから決して人間は単なる不完全という状態で満足できるような存在ではありません。常により良いものを求めて生きてしまうのが人間としての宿命なんですよね。欲求を持って生きる。欲求というのは、今が不完全だから、不完全な人間だから欲求が湧いてくるんだ。完璧になったらもう湧いてこない。その意味でも不完全であることを認めて許して、どのように人間としてお互いに協力して完璧に近づけていくか、そういうことを考えていかなければなりません。**

**不完全ということがあるから、人間は嘘はいけないと言うんだけど、人間は不完全だから嘘を言ってしまうこともある。不完全だから失敗することもある、裏切ることもある、罪を犯すこともある。これが不完全ということの意味なんですよね。そういう意味では、絶対に嘘を言うたらいかんというのは、これは人間に完全性を求める間違った倫理・道徳なんですね。だけど、嘘を言って良いわけはない。だから、人間は嘘を言った人間を責める、嘘を言わないように完全性を求める。これは間違った行為であります。嘘を言ってはいけないけども、嘘を言わないかんような状況に追い詰められて、心ならずも嘘を言ってしまうのが人間だ。人に嘘を言われるとムカつくんですけど、自分が誰かに嘘を言わなければならない状況になった場合、自分はどんなに苦しむか、どんなに悩むかと考えると、人が自分に嘘を言ったときの相手の心の中が見えてくるわけですよ。「多分あいつも相当悩んだだろうな。相当苦しんだだろうな。辛かったろうな」と。そういう気持ちがわかってくると、嘘を言った人間を責めるというよりは、相手の辛さや思い、心遣いがわかってきて、「多分あいつは相当悩んだな」と、責めるよりもむしろかわいそうになあ、という心情が湧いてくる。それが血の通った温かな心なんですよ。嘘を言った人間を責める人間には血の通った温かな心はない。嘘を言うことは悪いけれど、つかざるを得ない心をるところに血の通った温かな心が存在する証明となります。そうすると、責めるだけで終わることはない。「いろいろなことを考えて心遣いして悩んで、こういうことになったんだよね」「君の心遣いや辛さはよくわかる。だけど、嘘を言うことは良くない。今度は俺に相談してくれ」と。ここに不完全性を責めない、血の通った温かな心を持った人間の対応が生まれてくる。そのようにして人間の絆がつくられていくんだ。**

**子どもがよく親に嘘を言うことがある。先生にも嘘を言うことがある。多くの場合、言い逃れであったり、ことを隠すためですが、その背後には問題を大きくしたくない、表に出したくないと**

**いういろいろな心遣いがあって、嘘を言うということになります。嘘を言わない人は冷たい人なんですよ。嘘を言う人の方があれこれと心遣いをするんですよ。事実、本当のことを言うということは、心遣いをしなくても良いということになります。だけど、心遣いをする人間が気を遣うところに嘘が生まれる。案外、嘘を言う人の方が血の通った温かな心があり、嘘を言わない人のほうが冷たい。医者がレントゲンを撮ってがんを見つけた際に、患者にすぐに「がんです」と伝えたら、「ガーンとなって、もういかん」となってしまいますから。「嘘偽りなく伝えてしまっては、相手も悩むことになってしまいますから、今のところはぼやかしておこう」としておき、だんだんとやんわりと伝えていき、相手に気付かせることも努力。そして、相手が冷静に対応できるようにする。それが温情のある医者の診断であります。そういうところに愛ある嘘がある。嘘の中には愛や心遣い、血の通った温かな心が表現されている場合が多い。だから、我々は単純に嘘を言った人間を責めてはならない、相手を非難してはならない。一応嘘は責められなければならないけども、やはり嘘を言うまでのその人の心遣いというものに対しては、やっぱり理解を示してあげる、わかってあげる配慮がなかったならば、人間的な対応とは言えない。**

**だから子どもが親に嘘を言ったときにほとんどのお父さんお母さんは、「ダメじゃないか！」と叱るわけですよね。この「ダメじゃないか！」と言う親がその子どもとの絆を断ち切っているんですよ。それはなぜか。「嘘を言ったらダメじゃないか」と言われたら子どもはどう思うか。まだあまり理性が発達してないから口には出さないけど、子どもというのは「嘘を言ったらいかんことくらいわかっている。なんでお父さんお母さんは、俺の辛さをわかってくれへんの」という風に思って、お父さんお母さんに対する愛や信頼は断ち切られてしまう。その一言が、親子という絆を断ち切るんですよ。だんだんだんだん子どもは親にものを言わなくなってしまう。何かを言ったら注意されたり叱られるから何も言わない。結局、自分の辛さや悲しさをわかってくれる友達を求めてグレてしまう。**

**では、どうすれば親子の絆が保たれるのか。最初に「嘘を言ったらダメじゃないか」と言ってはならない。まず親としてすべきことは、親子とは理屈を超えた血縁という絆で結ばれているんだ。血縁という絆を忘れてはならない。血縁とは理屈を超えたもの。だから理屈を超えた反応を示さないと、親子の絆は断ち切られてしまう。絆を維持するためには、嘘を言った子どもに対して、「なんで私は親なのにあなたが嘘を言わなければならない状況になって苦しんでいるのに、わかってあげられなかったのか。ごめんね…」と謝って、抱きしめてあげて、涙を流す。そのときに子どもは「やっぱりお父さんお母さんだ。俺は嘘を言ったのに俺の辛さをわかってくれている」となり、親の愛が、理屈を超えた血縁という関係の絆の愛が、子どもにジワーッと染み込む。子どもは嬉しいと思う。これが絆をつくる基本なんです。人間は不完全だと知っている親がはじめてそれができる。不完全を責めない。嘘を言うこともある、それが人間なんだ。だけど、それだけでは子どもを堕落させる。盲目的な愛となってしまう。人間的に愛するならば、その次にどうするか。「だけどやっぱり嘘は言っちゃだめなんだよ」と言わなきゃならない。人間には理性があるから、理性という能力の存在を活用しないと、人間はつくれない。「今度、嘘を言わなければならないような困った状況になったら、お父さんお母さんにも相談してね。親子じゃないの、どんな問題でも一緒に乗り越えて生きていきましょうよ」と言ってあげるのが、絆をつくる方法なんですよ。これが人間の不完全性を認めて許して、そして協力して人生を生きていくという力になるわけです。**

**これは社内の人間関係におけるさまざまな嘘に対しても、同様な心遣いをして対応しなければなりません。「嘘を言ったらダメじゃないか」と上司から責められたら、もうその人はなかなか立ち上がれない。もうその上司を煙たいと思ってしまって組織が壊れる。もう自分は信頼されていないと思って、どんどんその人は卑屈になってしまう。結果として会社を辞めてしまうことになるかもしれない。その人の本当に持っている底力は会社において活かせなくなってしまう。嘘を言う心の温かな人間がいなくなってしまう。皆本当のことを言う。結局会社は、温かみのない冷たい組織になってしまう。会社の死。人間的な会社としては死んでるんだ。会社というのは、嘘も裏切りも失敗も罪さえも許して、それを活かして発展させていかなければならない組織であります。これだけ沢山の社員がいるんだ。中には罪を犯す人もいるかもしれない、失敗する人もいるかもしれない、いろんな問題を起こす人が出てくるし、また人知れず悩んでる人もいる。それを全部受け止めて、会社というものの発展のエネルギーをつくっていく。それがマネジメントだ。それが組織というものを率いるマネジメントだ。**

**たとえ会社の中に犯罪が起こったとしても、罪を犯した人間を単純に責めるだけで終わってしまったら、それは理性だ。人間的な血の通った温かな温情は全くなくなってしまう。人間的な組織であったら、罪さえも活かさなければならない。なぜならば人間は不完全だ。罪を犯すこともある。だから経営者としては、罪を犯した社員に対してどう対応することが大事なのか。確かに罪を犯すことは悪いことだ。だけども、「君がその罪を犯してくれたから、我が社の大きな欠陥、問題点が明るみに出た。君の犯罪に感謝をする。起こしてくれなかったら大きな問題点は明るみに出なかった、わからなかった。だから俺は君の犯罪に感謝するよ。俺は決して君の犯罪を無にはしない。これを活かして素晴らしい会社をつくってみせる。君は罪を償って刑務所を出てきたならば、また我が社に帰ってきてくれ。会社の発展のために力を貸してくれ。俺は待ってるぜ」なんて言って、刑務所に送り出す。これが絆のつくり方、理屈を超えた絆のつくり方なんだ。こうされた人間は、普通ならもうお払い箱になってしまってホームレスになるしかない。どこも雇ってくれないということになってしまうかもしれない。それを罪を償ったならば、また帰ってきて一緒に頑張ってくれって言われたら、「俺はこの社長のためだったら何でもしてやるぞ」という理屈を超えた思いになるかもしれない。これは理屈を超えた絆というのができてくる原理だ。常識では考えることができないような奇跡的な対応が、常識では考えることができない奇跡的な絆をつくってくれる。理屈で対応しているだけでは、理屈で考えることができるような繋がりしかできない。理屈を超えた奇跡的な決断がなし得る人間にのみ、理性では考えることができないような愛の奇跡が生じる。これを理屈を超えた絆と言うんです。これは極端な例かもしれませんけど、そういう対応ができるような人間性をつくっていかないと、組織力を高めていくという経営の成長は成し得ない。とにかく、不完全であることをどこまで活かしきれるか、大事な課題であります。不完全を活かしきれないと、理屈を超えた絆はできない。**

**次の絆をつくる原理は、「勝つことよりも力を合わせることが大切」だということです。これまでは勝つということをして発展してきました。競争がいかに人間の心を蝕むか、これは受験競争を見るまでもなく、あらゆるサラリーマンがライバルを設定させられて、お互いに競争させられた。それにより友情が壊れて、心の繋がりが断ち切られて、ただただ勝つことばかりに意識を使う。そんな非常に心がなくなってしまうような状態にさせられてしまったのが、これまでの会社の現実でした。今や世界がグローバル化して一体化してしまうと、誰かが勝って誰かが負けるということになってきても、勝っても本当に勝ったことにならない。負けた者の悲惨さが勝った者にも大きな影を落とすというのが、一体化した世界の現実であります。ようやく競争して勝つという原理が終わった時代なんですね。競争心をむき出しにして勝とうとする人間性は、醜い人間性だ。我々は競争とは全く違った新しい成長の原理を見いだしていかなければ、本当に人間的な温かみのある会社はつくれない。競争に変わる新しい成長の原理は何なのか。それは競争して勝とうとするんじゃなくて、力を合わせれば共に成長できる、という新しい価値観であります。人を蹴落として追い抜いて、勝って喜んでるという浅はかな薄っぺらな人間ではない。皆で力を合わせて、その人のダメなところは俺が助けてあげて、共に良いところを寄せ合って、そして良い成果を出していこうとする生き方が力を合わせて共に成長するという生き方であります。**

**不完全な人間はチームを組んで、パートナーを持って仕事をしていくということが、これからの新しい時代の仕事の仕方であり、生き方である。よく病院なんかでは、ある患者さんに１人の看護師さんを担当者とすると、１人の看護師さんの落ち度が患者さんに大きな命の危険をもたらすということがある。だんだんと何件もそういう事故が起こったもんですから、だんだんと病院も最低限度、患者さんにある行為が及ぶまでの間に３人の目を通そうと。３人でチームを組んで、そして１人の人間で生じる欠陥を補って、より完璧な患者さんへの対応ということをしていこうと。そういうチームで仕事をするという体制が最近はいろんな病院でつくられてきております。やっぱり、力を合わせて共に成長していくという組織の在り方なんですよね。とにかく競争して成長していく時代は終わったんだ。これからは不完全な人間がお互いに力を合わせて、共に成長していくという血の通った温かな人間組織をつくっていかなければならない。**

**であるがゆえに今は統合の時代なんだ。パートナーシップの時代なんだ。なんで急に20年ぐらい前から統合という言葉が出てきたのか。20年以上前の新聞には統合なんてことは一切全く見当たりませんでした。なんで21世紀になってから、統合という言葉がやたらに出てくるのか。毎日毎日、世界では何らかの意味での統合が行われて、統合こそまさに今の時代を動かすキーワードだ。統合に導かれて今の時代は動いているんだ。なんで統合の時代になったのか、それは競争の時代が終わったからだ。力を合わせて共に成長していく、これがこれからの人間なんだ。そのことを統合という言葉は表現してるわけです。勝ち負けを争ったら負ける者をつくってしまう。そこに妬みや恨みや嫉妬心が生まれてくる。醜い人間をつくる。最後に勝つのは１人しかおらん、でも力を合わせれば皆で成長できる。そういう競争の時代の終わりを意味するものとして、統合という言葉が生まれてきて、今や全世界が統合という言葉で動いているわけであります。**

**統合というのは、相異なるものが力を合わせて生まれる相乗効果を成長・利益と考える。有機的な繋がりをつくっていく。有機性というのは価値を生む働きをする。つまり、シナジー効果が生まれるのが、統合の意味です。最高のシナジー効果を期待する人間同士の組み合わせが組織において大事になってくる。誰と誰を一緒に仕事をさせたら最も良い結果が出るのか、誰と誰を仕事をさせたら最も気持ちよく働けるのか。そういうことを考えながら、人間同士の組み合わせというものを中心にした組織の在り方をつくっていく、それがこれからの時代の人間的な組織というものの理想であります。誰と誰を一緒に仕事をさせたら最高の仕事ができるのか、誰と誰を一緒に仕事させたら最も気持ち良く働けるのか。そういうことをいろいろ考えながら、組み合わせを考えていく。これが統合の時代の人事の在り方であります。**

**とにかく、競争して勝つという時代は終わった。これからは力を合わせて共に成長するということが大事な生き方になってきた。だから統合の時代であり、パートナーシップの時代なんだ。だけど、現実的には同業者がたくさんおったら競争という関係性自体はなくならない。競争という関係性は永久に存在する。だけども競争という関係性から出てくるエネルギーを「ライバル会社をぶっ倒せ」という敵を倒すという風な力に使っていくことが悪なんだ。それが醜いんだ。今はどうなってるかと言ったら、競争という関係性から出てくるエネルギーを外に向かって敵を倒すことに使うんじゃなくて、出てくるエネルギーを内面的に昇華していって、自己変身・自己創造・自己変革の力に使っていこうという在り方に変わってきているわけですよ。競争という関係性から出てくるエネルギーを使って、自分の会社の変革・イノベーションに使っていく。リストラクチャリングに使っていく。自己変身・自己創造・自己変革を達成するためのエネルギーに使っていく時代になってきている。**

**それはなぜか、会社が発展するのはライバル会社を倒すことで発展するのではない。会社の本当の発展は、消費者の要望にどこまで応え続けるかということと、もう１つは消費者すらまだ気が付いていない理想的な未来を示すことによって、消費者を教育し誘導していってものを売っていく、その２つが会社発展の基本原理であります。消費者の要望に応えるだけでは、消費者に主体性を奪われたプロとしては不甲斐ない対応だ。プロとして誇りを持った仕事をしようと思ったら、消費者すら気づいてない未来を示すことによって、消費者の欲求・要望を自分たちが提示したより素晴らしい方向に導いていってものを売っていく、この方法となります。現実的には消費者の要望にどこまで応え続けていくかが、同業他社との間の関係性を考えて成長していくための原理である。結局、つぶれる会社は消費者の要望に応えられなかったんだ。生き残る会社は、消費者の要望に的確に応え続けようとする努力を成し遂げてきた会社だ。それが会社の仕事の仕方としては基本ですよね。それだけでは、消費者に主体性を奪われて、欲求に振り回される会社になってしまう。会社がプロとして誇りを持って消費者に対応していくためには、消費者すらまだ知らない、気づかない未来を提示して、その方向性に消費者を誘導していく…これが誇り高いプロの仕事のやり方であります。いずれにしても会社は競争して勝つことによって発展するんじゃない。会社の発展は、消費者の要望に応える創造力、消費者すら気づかない未来をつくり出す創造力、このクリエイトする力が会社の本当の存在と発展というものをつくり出すことになっていくんだ。そのことがわかると「競争の時代は終わった」と言われるわけが理解できます。**

**競争そのものはなくならないんだけど、競争して勝つという人間性を破壊するような醜い時代は終わった。これからはもっと人間味のある、人間的な血の通った温かな心を持った仕事の仕方というものが、望まれ、つくられる時代に入っている。それが力を合わせて共に成長する、力を合わせて１人の人間では不可能なことを可能にしていく、そういうクリエイトという仕事の仕方である。そこに統合の時代、そしてパートナーシップの時代ということの本当の意味があります。これもまた絆を強めていくための大事な原理であります。**

**その次は、「ユーモアのセンス」。ユーモアというのは心の繋がり、絆、結びつきをつくる原理です。ユーモアとはどういうことなのか。その反対語にブラックユーモアというものがありますが、それは人に不安や恐怖というものを感じさせます。ユーモアとは単に笑うことではない。希望や勇気や癒やし、安心、喜びを与える言動を指します。一般的には笑いと表現されがちですが、言葉の意味としては希望や勇気や癒やし、安心、喜びなど。そういうものを持っている人をユーモアセンスがあるとも言います。西洋映画なんかを見ると、皆が追い詰められてどうしようもない状態になった際に「よくこんな場面で格好いいことが言えるな」と思えるユーモアをパッと出す場面があります。ユーモア自体が西洋の概念ですので、そういう意味では西洋映画・西洋人から学ばなければならないところがたくさんあると思います。ユーモアという言葉は、ヒューマンという言葉と親戚筋にあたる言葉で、humまでは同じ綴りなんですよね。ある意味では、ユーモアがあるということは、人間性があるとも言えます。**

**よく笑うというのは人間だけだと言われてるように、笑いの文化というのは人間にしかない。ユーモアこそ理屈を超えた人間の心の繋がりをつくる、人間的に温かみのある能力ということができるわけなんですね。とにかくサラリーマン社会においては、酒を飲みに行ってお互いに冗談を言い合って笑わせ合いながら、心の結びつきをつくるということがなされているわけなんですね。日本の中では案外とまだユーモアは笑いの段階で終わってしまっていることが多くて、本当に勇気を与えたり、希望を与えたり、やる気を与えたり、安心感や癒しを与えるという深みのあるユーモアは、できていないように感じるんですけども。もっともっとそういう意味では、ユーモアのセンスを西洋人から学んで我々がそれを自分のものにして、もっともっと現実を生きる力として使っていかなければならない大事なんじゃないかという風に思います。とにかく、絆をつくるためには磨いていかなければならない能力ということですね。**

**最後の課題ですが、最後は「人間関係修復への強い意志」。人間関係というのはいろんなところで壊れやすい、問題が生じやすい。問題が生じると「もうこれはだめだ」と思って諦めてしまって、人間関係修復の努力をしないということが案外と多いんですけどね。だけど壊れてしまったらもう、すぐ諦めてしまうのは、やっぱり愛がない。人間への愛がない。本当に人間への愛があったならば、何とかして良い関係に戻したいなと願うのが、人間性と言うことができる。我々の命から湧いてくる欲求というのは、できることなら皆と仲良くしたいというのが、命の欲求なんですよ。なんで我々の命から、命の根源から湧いてくる欲求が、できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいという欲求なのか。それは、人間の命をつくったのは、母なる宇宙の愛の力だ。母なれば、自分の産んだ子どもたちが皆仲良く生きてくれることを願っているはずだ。お母さんからすれば、自分の産んだ子どもたちが喧嘩したり、対立したり、殺し合ったり、憎しみ合っているのは、本当に悲しいし、情けないし、泣きたくなるような現実なんだ。我々の命の根源から湧いてくる、できることなら皆と仲良くしていたいというのは、まさに命をつくった母なる宇宙の願いであり、祈りであり、思いなんだ。命は母なる宇宙がつくったものだから、本当に我々が人間らしく、命を有り難いものだと思って生きていこうと思ったら、母なる宇宙の願いであり、祈りであり、思いを実現する生き方をしないと。そこにのみ人間らしく生きる、根本の生き方がある。**

**我々は決して諦めてはならないんだ。どういう人間関係になってしまっても、できることならこの人とも仲良くしたいという思いをどこまで強烈に持っているか、これが人間への愛があるかどうか、人間としての血の通った温かな心を持って生きているかどうかの最後の決め手であります。どんなに人間関係が悪くなっても、根底のところではできることならこの人とも仲良くやっていきたいんだという気持ちをなくさないこと、これが人間への愛の究極の原理という風に言うことができると思います。そして人間関係修復への努力をし続けること、これを愛の実践という風に言うことができるわけです。愛というのは、ただ単に存在するものじゃなくて、愛は努力なしには存在しない。素晴らしい人間関係をつくろうという努力が、愛の実証であり、そのことによって愛は存在することができる。相手のために何か努力しようとする気持ちがなくなったら、愛は失せたんだ。相手のために努力しようという気持ちがある限りは、愛はまだ存在するということができる。愛の実践的原理は努力だ。愛は努力によって証明できる。努力によって証明しなければならない。そのために決して我々は諦めることなく、できるだけたくさんの人と仲良く対立を乗り越えて生きていく努力をし続ける…そこに人間性という根本がある。それが愛ある人間の大切な生き方だ。たとえ問題が解決しなくてもできることなら仲良くしていこうとする努力に、人間への愛がある。結果が出なくても、その努力に意味がある。**

**絆を大事にしながら、自分の周りに素晴らしい人間関係をたくさんつくっていくという目的を持った生き方を実践してもらいたいと思います。自分の周りに嫌な人が増えれば不幸だ、自分の周りに自分の好きな人が増えてくれば幸せになれる。素晴らしい人間関係をつくることが、母なる宇宙から命に託された人間的な生き方の目標なんだ。できるだけたくさんの人と仲良く楽しく幸せに生きていける自分を我々はつくっていかなければならない。今ある人間関係をもっと素晴らしいものにしていく、そういうことも考えなければならない。それにより、自分も幸せになれるし相手をも幸せにしてあげることができる。その素晴らしい人間関係をつくるための努力として仕事をしている。仕事は人を幸せにすることで自分も幸せになるという実践だ。仕事こそ絆をつくるための最も具体的で現実的な努力の場である。仕事を通して何かあったら、助けてもらえる自分をつくっていくことも考えなければならない。何かあったら、頼れる人も我々は必要なんだ。この地域は伊勢湾台風で大きな被害を被った。その際も多くの人の助け、絆によって復活することができた。今回の東北の大震災もそうですね。またいつ東南海地震が起こって、この地域がまた津波で危機に瀕するかもしれない。そのことを思えば、我々はもっともっと絆を大事にして今困っている人に手を差し伸べて絆をつくる…そうすれば、自分が困ったときにまた絆によって助けられる。そういう理屈を超えた愛の世界が実現されることになるであろう。その最も大切な努力の現場が職業という実践なんです。職業こそ最高の愛の表現である。あらゆる職業は愛の実践だ、人間社会の中に絆を強烈につくっていくための大事な作業であり、生き方である。もっともっと職業を通して、人間として大事な絆をつくっていく、母なる宇宙の願いを実践していく必要があるのではないかと、強く思うわけであります。絆こそ愛だ、職業は愛の実践だ。絆づくりは仕事の中にある。是非、そういう思いで今年も一年大いに頑張ってもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**